

スピリチュアリティの考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学院看護学研究科 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): スピリチュアリティ, 精神世界, スピリチュアルケア, 霊性, 生きがい キーワード (En): 作成者: 長山, 正義 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20180403-134

スピリチュアリティの考察

Spiritually and Nursing

長山正義¹⁾

Masayoshi Nagayama

キーワード：スピリチュアリティ、精神世界、スピリチュアルケア、霊性、生きがい

はじめに

spiritualityは霊性とも訳されるが、鈴木大拙は日本の霊性として、霊性の前に日本を置き日本の霊性であることを強調している（鈴木、1999）。日本的霊性とすることによって霊性というものが国や地方によってやや異なっていることを表現している。例えば、霊性をキリスト教信者が有しているものに限定して考えると、同じ宗教であったとしても他国の信者が有している霊性と日本での信者の霊性とは異なっているということである。わが国とは風土、言語、教育などが大きく異なっている国が多々あることから、その国々で霊性のもつ意味が異なるということである。また、スピリチュアリティつまり霊性を宗教信仰に限定することは必ずしも現実的ではない。spiritual, but not religious (SBNRと略す)に傾倒する人々、つまり宗教を信じないが、霊性は信じている人々の存在である。unchuched peopleとも呼ばれるが、これは内村鑑三の無教会主義（無教会主義キリスト教）と紛らわしい。無教会主義はキリスト教信仰の形式の一つであるとされるので、SBNRの人々つまりunchuched peopleとは明らかに異なる。このSBNRに傾倒する人々が最近、米国で増加しているといわれる（R.C.Fuller, 2001）。

宗教では信じるということが最も重要な要素の一つであるが、信じる対象は現実世界を超越したものが多い。わが国などでは山林とか巨木などの自然にある全てのものを対象しているアニミズム的のものも少なくない。また、

哲学的信念や生きがいなどはスピリチュアリティとはいえないが、その中には宗教に近いものもあることは経験されることである。逆に、明らかに宗教である禅宗は哲学的側面を多く備えている。このようにスピリチュアリティの定義については必ずしも一定ではない。そこで、本著では、はじめにスピリチュアリティの定義をおこない、その後にスピリチュアリティやスピリチュアルケアについて考察する。

スピリチュアリティの定義

スピリチュアリティあるいは「霊」は、広辞苑によると、人の肉体に宿り、または肉体を離れて存在すると考えられる精神的実体と解説されている。これ以外の意味として、“霊”には読み方の違った意味が数点あげられている。そのうちの主なものをみると、まず、「ち」と読むもので、複合語として用いられ自然物の威力・霊力を表す語となっている。その例として「いかずち（雷）」、「おろち（蛇）」などがあげられている。「りょう」と読まれるものは、たましい。特にたたりをするもの。「生霊・死霊・怨霊」が例としてあげられている。「たま」といわれるものは“たましい”を意味している。

わが国では仏教の影響は当然大きいことは否めないが、古代から基本的な意識構造に神道の文化的背景がある。神について、本居宣長は「凡て迦微（カミ）とは、古御典等に見えたる天地の諸の神たちを始めて、其を祀れる社に坐ス御霊をも申し、又人はならにも云はず、鳥

2007年10月30日受付 2007年12月12日受理

¹⁾ 大阪市立大学医学部看護学科 Osaka City University School of Nursing

〒545-0051 大阪市阿倍野区旭町1-5-17

獸本草のたぐひ海山など、其ほか何にまれ、尋常（よのつね）ならずすぐれたる徳のありて、可畏き（かしこき）物を迦微とは云うなり。すぐれたるとは、尊きこと善きこと、巧しき（いさましき）ことなどの、優れたるのみを云に非ず、悪しきものなども、よにすぐれて可畏き（かしこき）をば、神と云うなり」と述べている。本居宣長は江戸時代の漢方医であり、国学の完成者でもあるが、迦微は、事物や善悪に関係なく、そこから特別に“突出”したものであればカミであるとしている（本居、1993）。

このように、わが国の「霊」にはキリスト教やイスラム教などのような一神教にみられる様なスピリチュアリティといわれる意味だけではなく、自然界を含めてあらゆる“霊”が含まれている。また、英英辞書から spirituality に関連した言葉である spirit をみると、life and consciousness not associated with a body と解説している。これは明らかに二元論の立場からの解説であり、神道にみられるようなアニミズム的なものではない。

クリスチャンであり、パストラルケアを行っている窪寺はスピリチュアリティを以下の如く定義している。“スピリチュアリティとは、人生の危機に直面して「人間らしく」「自分らしく」生きるための「存在の枠組み」「自己同一性」が失われたときに、それらのものを自分の外の超越的なものに求めたり、あるいは自分の内面の究極的なものに求める機能である”。この定義は、“危機に直面したとき”、“「存在の枠組み」「自己同一性」が失われたとき”という制限がつけられて、スピリチュアリティの意味の範囲を限定している。また、“自分の外の超越的なものに求めたり、あるいは自分の内面の究極的なものに求める機能である”とあり、危機などに際して宗教的なものなどに依存する機能であると定義している（窪寺、2004）。これは終末期における患者のスピリチュアルケアを念頭においてこのように定義されたので当然と思われる。しかし、人には本来、スピリチュアリティは基本的に備わっているものであり、“危機に直面した時”などだけの機能ではなく、危機がなくても人は絶対的（霊的）なものに憧れる傾向を持っているのは明らかであり、スピリチュアリティの意味する範囲はもっと広くとってもよいと思われる。

著者は、ここではスピリチュアリティを“人間に特有な心理的あるいは精神的活動の総体”と広く定義したい（森、1996）。霊（靈魂）を“身体の存否にかかわらず不死な、精神的ななんらかの働きかけをする実体で、現実世界の外の世界にも存在しうるもの”とするような非科学的な観念は採用しない。しかし、現実世界の外の世

界にも存在する実体は認められないが、信仰などによって生じる、あくまでも主観的な事実としてのスピリチュアリティは容認したい。なお、浄土真宗大谷派の宗教哲学者で真宗大学（現・大谷大学）の初代学監であった清沢満之は精神主義という言葉を用いて、宗教哲学を論じている（清沢、2003）。また、島藺はスピリチュアリティの訳に霊性以外の言葉として精神世界という言葉も使っている（島藺、2007）。著者はスピリチュアリティとともに精神世界という言葉と同義として用いることにする。

生活世界と精神世界

人の世界を考えると、日常生活の中で種々の経験や刺激を脳（精神）に与える世界としての生活世界と、それらを受け取る内なる精神世界に分けることができる（図1）。このように分けると、自己の外である世界（生活世界）は図1でみるように、精神世界と重なった部分と重ならない部分からなっている。この重ならない部分は自分の生活世界では未だ経験していない世界である。当然、人が同じように生活していたとしても生活世界からの刺激を受ける精神世界はそれぞれ異なっており、各個人で全く同じ世界をもつ人は存在しない。また、生活世界の膨大な情報を個人レベルで全てに関わることは困難であるので、生活世界での未知なる部分は消失しない。精神世界で生活世界との重なりがない部分は、生活世界から誘導されて生じた精神世界と創造的に動いている精神世界に加えて、意識にはあがらない無意識の世界を含んでいる。

生まれたときに始めて生活世界での実在性が精神世界で意識され、その後徐々に精神世界が構築されていく。

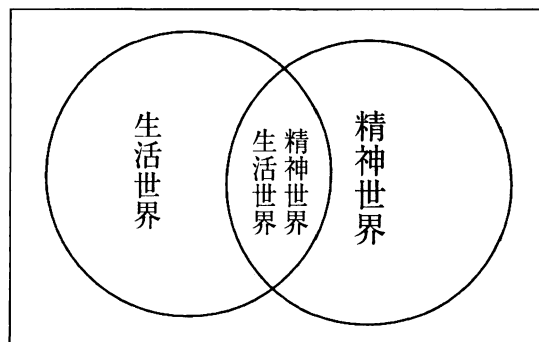


図1 生活世界と精神世界

生活世界は精神世界と重なった部分と重ならない部分からなっている。重ならない部分は生活世界では未だ経験していない世界である。精神世界の生活世界との重なっていない部分は、生活世界から誘導されて生じた精神世界と創造的に動いている精神世界に加えて、意識にはあがらない無意識の世界を含んでいる。

意識上にあがる食欲などの生命を維持するための本能的な部分を除けば、John Lockeが述べているように、生まれたときの精神世界は白紙であるといえる。この白紙状態の精神世界に新たな情報を付加して、精神世界を豊かなものにするためには生活環境とともに親や教育機関などによる教育環境が大きく関わっていることは明らかである。生まれてからオオカミに育てられて成長した子供は人としての多くの資質が失われていることが知られており、人として成長するためには人が関わった生活環境の下で育てられる必要があるといわれている。生活世界の環境に人が関わっていることが重要であり、ここからのいろいろな経験（刺激）や教育によって人の精神世界が育まれていくのである。人は生得的にスピリチュアリティを有しているとはいえ、生活世界から経験や刺激がなければ人としてのスピリチュアリティは育まれない。生活世界からの十分な経験や刺激によって精神世界の充実度が増してくるのである。

精神世界を宗教的に深化させるのが宗教である。宗教は論理的に構成されたものではないことは教典や聖書をみれば明らかである。宗教の目的が精神世界の非論理的な領域での“神仏”などの存在を確認する作業であるとなると、論理的である必要性はない。むしろ、論理的であることが禍して、宗教としての根本的なところが消失する。

宗教における信心レベルは、単に軽い信仰心の人や仏教で云う“信の決定（けつじょう）”とか“信の獲得（ぎやくとく）”といわれるものを得た人まで、さまざまな宗教的精神世界のレベルがある。神や仏などの存在は実体ではないが、実体であると確信的になる人もいることは事実である。清沢満之はこれを実体ではなく、主観的事実であるとしている。神や仏を実体であると意識する様な経験は宗教的な激しい修行などの際に生じることが知られている。また、LSDなどの薬物を服用した際にも生じるとされるが、統合失調症（分裂病）のような疾患でも同様のことが知られている。宗教は“幻想である”とか“麻薬である”ともいわれるが、この様な表現は宗教を否定的に考えて、ある一面を強調したものである。

また、聖書や教典などでは方便として記されている部分が多く、信者の一部の人はこれを絶対的に正しいものとして信じている。原理主義者である。この様な人は米国では米国のタリバンとも呼ばれているが、聖書に基づいて人工流産に反対して産科医の殺人事件が起こっている。これに似たような例は日本にも古くより知られている。本願誇りといわれているものである。これは、誰でも南無阿弥陀仏を唱えれば極楽浄土にいけるという本願

を信じて、何をしても大丈夫ということで悪事などが行われたという歴史的事実から伺える。このような宗教のマイナス面に鑑み、ベストセラーとなった「利己的な遺伝子」の著者であるリチャード・ドーキンスは宗教の完全否定とも受け取れる意見を述べている（ドーキンス、2007）。

宗教をどのように考えて、これを個人や社会がどのようにみるかということが重要である。宗教を政治的に利用するなどして、方向を誤ると、個人レベルならまだしも、組織や国レベルになると、オーム真理教事件などのようにとんでもない事件や戦争が起こるのである。

生活軸と精神軸

スピリチュアルケアに関連して生活軸と精神軸について言及したい。人は、信仰や“愛する人のため”とか、“生きがいにしているもののため”というような生活に活力を与えたりするような心理的な軸があれば活動的で元気になる、いろいろなことに頑張るものである。このような心理的に影響のあるものの中で生活に密着してきたものを生活軸とし、主に精神世界にあって生活世界とは関連の薄いものを精神軸してみよう。表1は、生活軸と精神軸に属するものについて試作的にあげたものである。

生活軸は必ずしも安定していない、喪失することがある。例えば、趣味としての旅行が生活軸である場合、健康を害して旅行が不可能となれば、軸が喪失して精神的な活気も失われる。また、長年にわたる相思相愛の夫婦で相手が突然、死亡した場合には残った者は、軸が喪失して精神的に打撃を受け、自殺などを考えるなどの例はよく見聞きすることである。

精神世界は科学的な思考を行う論理的な領域と、論理では説明できない感情的あるいは直感的な非論理的な領域が含まれている。このことから、生活軸の喪失による心理的な影響は、その軸が精神世界に入り込んでいる方向と程度によって異なる。つまり、精神世界の論理的な領域と情性である非論理的な領域の、どちらの領域に深

表1 生活軸と精神軸の例

生活軸	人間関係（家族、友人、恋人など） 趣味（書道、茶道、剣道、囲碁、将棋、ベットの、グルメなど）、生きがい（金銭財産、仕事、趣味など）、その他
中間軸	元来、生活軸であるが、精神世界へと深化した軸
精神軸	宗教、SBNR、哲学的信念や信条、信念など

く入っているかによって影響が異なってくる。このような精神軸へと深化した生活軸を中間的な存在であるので一応、中間軸としておく。

精神世界は論理的領域と非論理的領域を有していることから、精神軸にもこの両者に位置づけられる軸があり、それぞれ論理軸、情性軸とする。前述のように生活軸も精神世界へ深化することによって論理軸や情性軸のようなものになりうる。しかし、このような軸は生活軸に関連をもっていることから、精神軸との決定的な違いが生じる。つまり、生活軸に関連しているものはいずれ喪失するが、精神世界の特に情性軸は絶対的な世界であり、喪失しないという大きな違いである。また、生活軸が精神軸になるためには生活世界を飛び越えるような昇華が必要である。

精神軸として高度な哲学的思考のうえに確立された信念などは論理軸である。論理的に構築された論理軸は相対的で比較的安定しているが、常に論理の訂正や変更が行われることが多く、必ずしも安定した絶対的な精神軸とはいえない。一方、情性軸は非論理的に構築されるが、宗教的に確立された情性軸は強力な精神軸となる。超越的なものを実体とする主観的な事実となり、論理的な介入は殆ど意味をなさないものである。極論的に言えば、この軸の存在によって、生活条件などに関係なく、精神的な安心や癒しなどがえられ、生き生きとして、活力的となる。所謂、宗教の救済原理が働くのである。

スピリチュアルケアと生活軸・生命軸

平成10（1998）年のWHO執行理事会にかけられた健康の定義は、「完全な肉体的、精神的、spiritual及び社会的福祉のdynamicな状態であり、単に疾病または病弱の存在しないことではない」となっている。従来の定義にspiritualとdynamicと2つの単語が追加されたものである。つまり、この定義を採択すると、スピリチュアルに不十分な人は健康ではないということであり、一方スピリチュアリティを強化すれば健康の増進につながる事が推測され、スピリチュアルケアは健康の回復や病状の回復に必須のものになる。WHO執行理事会ではこの定義に賛成した国が22カ国、反対した国はいなかったが、棄権が8カ国であり、未だ総会の決議には至っていない。

もし、健康の定義にスピリチュアリティが入ってくると問題がないわけでもない。まず、各国でスピリチュアリティ自体の意味づけが異なる恐れがある。また、政治的な思惑で意図的にスピリチュアリティを歪曲して、政治的に利用する指導者が出現するかもしれない。医療面

では、スピリチュアルケアが貧しい国の経済的理由などで医療の中心に置かれると、医療費は低下するが、医療レベルも低下する危険性がある。

しかし、スピリチュアリティ自体に問題があるわけではない。それを理解したり、利用したりする人間側の問題である。スピリチュアルケアは病気を治すことはないが、病気を癒やすことはできる。スピリチュアルケアは病気が存在したのままでも生きる活力を与えることを意図するものと考えたい。治療法がなく、絶望的であったとしても、この活力は病気の改善や治療などに希望や期待を与え、QOLを向上させるものである。

俳人の正岡子規がカリエスの痛みで身動きができない状態で記した「病牀六尺」のなかで「余は今まで禅宗のいはゆる悟りを誤解して居た。悟りといふ事は如何なる場合にも平気で死ぬる事かと思つて居たのは間違ひで、悟りといふ事は如何なる場合にも平気で生きて居る事であつた。」と宗教的な悟りについての感想を述べている（正岡，2003）。これが宗教的なスピリチュアルケアの目的の一つでもあると解釈したい。

以上のことから、スピリチュアルケアのクライアントが情性軸をもっている場合では、クライアントの精神軸（情性軸）を強化する方向、つまり宗教的なスピリチュアルケアでクライアントを癒やすことができる。また、クライアントが論理軸である場合には、軸となっている論理の内容によってはスピリチュアルケアの困難が予測される。生きることに對して強い論理軸であれば、情性軸と同様にそれを強化する方向でよいが、生きることに執着しない論理軸であれば、自殺などの危険性がある。深化した論理軸は頑固であり、病気の治療が唯一の癒しであることが多く、治る見込みのない場合でのスピリチュアルケアは極めて困難になると思われる。

生活軸は不安定な軸であつて、病気が軸の存在にそれほど影響しなければ問題はないが、大抵の生活軸は重症の病気であると容易に喪失してしまうのが特徴であり、それぞれに合わせたスピリチュアルケアが課題となるだろう。

おわりに

スピリチュアリティについて考察した。スピリチュアルケアについては必ずしも宗教を必要としないが、宗教を抜きにしては考えられない。しかし、現在の科学的、論理的世界でどれほど受け入れられるか疑問ではあるが、スピリチュアルケアは医療の一つの手段になりうると思われる。

また、スピリチュアルケアに関しては、いかがわしいものもあるが、最近、かなりの書籍、論文などがみられるようになっている。スピリチュアリティは実際には説明に困難を伴うものであり、実体のないものを医療者が正しく修得できるかが課題であると思われる。

引用文献

- 鈴木大拙 (1999) : 日本の霊性. 鈴木大拙全集第8巻、岩波書店、東京、24-26.
- Robert C. Fuller (2001) : Spiritual but not religious. Oxford University Press, USA、1-12.
- 本居宣長 (1993) : 本居宣長全集第9巻、筑摩書房、東京、125.
- 窪寺俊之 (2004) : スピリチュアルケア学序説. 三輪書店、東京、5-8.

- 森宏一編 (1996) : 哲学事典. 青木書店、東京、517.
- 清沢満之 (2003) : 精神主義. 清沢満之全集第6巻、岩波書店、東京、3-5.
- 島蘭進 (2007) : スピリチュアリティの興隆. 岩波書店、東京、46-48.
- リチャード・ドーキンス (2007) : 神は妄想である (垂水雄二訳). 早川書房、東京、169-237.
- 正岡子規 (2003) : 病牀六尺. 岩波書店、東京、43.

参考文献

- 安満利磨 (2001) : 宗教の深層. ちくま学芸文庫、東京.
- ウォルデマール・キッペス監修 (2003) : NHSにおけるスピリチュアルケア (関谷英子訳). サンパウロ、東京.